

気付く力、感じ取る力を育む音楽学習

— アカペラ四部合唱の声部の役割と全体の響きとのかかわりから —

1 題材のねらい

声部の役割と全体の響きとのかかわりをテクスチャ（音や旋律の組合せ方、和音や和声の構成）に着目して考え、表現を工夫しながら合わせて歌うことができる。

2 授業の構想

(1) 子どものとらえと資質・能力について

混声四部合唱「大地讃頌」の取組の中で、響き合う合唱になるために大切なことは何かを問いかけたところ、子どもたちから次のような意見が出た。

- ・音程を合わせる ・声質をそろえる ・発音をそろえる ・互いの声をよく聴く
- ・パートのバランスを考える ・音（和音）の構成を理解してバランスをとる など

これらの意見から、「音程を合わせること」と「声質をそろえること」に重点を置き、しっかり聴き合うことをねらいとして、ピアノ伴奏なしでの活動に取り組んだ。パート練習及び女声（ソプラノとアルト）、男声（テノールとバス）での合同パート練習を経て、ピアノ伴奏なしでの4パートによる合わせに取り組んだところ、次のような感想が得られた。

今日は、音程と声質を意識して取り組みました。ソプラノとアルトが同じ音になるとき、はじめは声がかく違ふように感じていましたが、やっていくうちに1つの音のように聴こえて、すごいなと思いました。この2つのことを意識して周りに耳を傾けるだけで、こんなに声が響いて美しいハーモニーになるんだなと思いました。
(生徒A)

生徒Aは、これまで何気なく発していた歌声に対して、「音程」と「声質」への意識を高め、お互いの声を聴き合って歌った。その結果、一人一人の音程と声質がそろふことによって、何人もが同時に出している歌声が溶け合って一つになり、響き合っていることに気付くことができた。このような気付きや感じ取りの積み重ねと、気付きや感じ取りの共有が、新たな気付きや感じ取りを生む第一歩となる。また、音程を合わせ、声質をそろえるには、ある程度の歌える技能が身に付いていなければ、音楽表現として実現することはできない。よりよい音楽表現を追求するために、音楽科における子どもに備えさせたい資質・能力を次の3つとして、学習を展開した。

- 気付く力や感じ取る力
- 気付いたことや感じ取ったことを伝えるコミュニケーション力
- 音楽表現をするために必要な歌唱、器楽、音楽づくりや創作の技能

(2) 資質・能力を育むために

本題材では、声部の役割と全体の響きとのかかわりをテクスチャに着目しながら合唱する活動に積極的に取り組む子どもたちの姿を目指した。

音程や声質を聴くことは、いわば一次元的な聴き取りであり、このような聴き取りでの感受は、多くの子どもたちの身に付きつつある。そこで本題材では、もう一つ上のステップとして、音楽の縦軸と横軸のかかわりに着目するという二次元的な聴き取りから音楽表現を追求し

ていく授業展開を構想し、より気付く力や感じ取る力を育もうと考えた。音楽は、同じ瞬間（縦軸）に複数の音楽を形づくっている要素が絡み合っている。また、音楽は時間とともに流れており（横軸）、これも複数の音楽を形づくっている要素が絡み合って進んでいる。この複雑な構造をより簡単かつ的確に示す教材として、アカペラ合唱を選んだ。

今回扱った楽曲は、アカペラ混声四部合唱「フィンランディア」（土肥武日本語詞／J. シベリウス作曲／橋本祥路編曲）である。9小節目1拍目までは混声三部、2拍目からは混声四部に編曲されており、原曲同様、9小節目2拍目からの音の構成が見事で、音楽の縦軸と横軸のかかわりに着目させるのに適した教材である。

3 展開計画（全4時間）

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇願う子どもの姿
1	1 2	○アカペラ合唱の特徴やよさを見付け、音取りをして合わせて歌う。 ・アカペラ合唱の特徴やよさを見付ける。 ・「フィンランディア」に出合う。 ・各パートで音取りをしたのち、女声パート・男声パートで合わせて歌う。 ・各パート及び女声、男声での合同パートで音程を確認したのち、4パートでの合唱をする。 ・9小節目にポイントを絞り、四部が変わることによって生まれる響きの豊かさに気付く。	◇気付いたことや感じ取ったことを積極的に伝える姿 ◇2パートずつの合同パートで、声（音）の響き合いを高めようとする姿 ◇気付いたことや感じ取ったことを積極的に伝える姿
2	3 4	○混声三部から四部が変わった部分の響きの豊かさの要因を探り、その部分の歌い方を考え、全体の響きを味わう。 ・各パートで音程を確認して、4パート合わせて歌い、9小節目の四部が変わることによって生まれる響きの豊かさをテクスチャに着目して探る。 ・各パートがどのように歌うと響きの豊かさが引き出せるのか、各パートで歌い方を探りながら練習をする。 ・各パートでの意見をもとに全体で合わせて歌う。 ・ホモフォニーなどの合唱様式の歴史的背景を知る。	◇気付いたことや感じ取ったことを積極的に伝える姿 ◇試行錯誤しながら自分の考えを積極的に伝えたり、表現しようとしたりする姿 ◇各パートの歌声をよく聴き合い、表現を高めようとする姿

4 授業の実際

(1) アカペラ合唱の特徴やよさに気付く（第1次第1・2時）

導入としてアカペラ合唱を聴き、アカペラ合唱の特徴やよさを見付け、それを全体で発表し合い共有する活動を行った。選んだ曲は、バンキエーリ・シンガーズが歌う「ふるさと」（高野辰之作詞／岡野貞一作曲／若松正司、シヨマ・サボー編曲）である。「ふるさと」は誰もが知る日本の名曲である。この聴き慣れた旋律を男声のアカペラアンサンブルで聴くことによって、アカペラへの興味・関心を高めようと考え選曲した。生徒は、次のような特徴やよさを挙げた。

響き

- ・伴奏がないことで、声の響きが伝わりやすい。 ・声の響きをしっかり感じることができる。
- ・響きが広がっていく。 ・響きがぶうあーと聴こえる。
- ・音程がはまっていればグーンと飛んでくる。 ・倍音を楽しむことができる。
- ・透明感がある。 ・余韻が楽しめる。 ・ベースとかが、ちゃんとしていると曲に厚みができる。
- ・声だけでかなりの音域がカバーできるので、曲に厚みがやすい。

ハーモニー

- ・声だけによるリズムとハーモニー。 ・声の重なり，ハーモニーがより伝わる。
- ・和音が美しい。 ・不協和音が気持ち悪くない。
- ・繊細な音の混ざりなども全て聴ける。→ 声だといろんな組み合わせがどれもいい具合に混ざり合いきれいになる。

その他

- ・柔らかく包まれるような感じ。
- ・男声の一つのまとまりとして聴こえる。
- ・楽器だとハモっていても一つ一つの音が強調されて一つの音楽ができるけど，アカペラだと，それぞれの音が互いにいい意味で打ち消しあったり，調和しあったりして，一つのまとまりのボアボアしたものにきれいにまとめられるように一つの音楽になっている。
- ・雰囲気声を声だけで表現しないとイケない。
- ・テンポをキープするのがとても難しいけど，自分たちの声で自由に演奏できる。

次に「フィンランディア」を聴いた。まず，オーケストラによる演奏を聴き，その後，フィンランド語でのアカペラ女声合唱版と日本語詞によるアカペラ混声四部合唱版（土肥武日本語詞／J. シベリウス作曲／橋本祥路編曲）を楽譜を見ながら聴いた。その際，「フィンランディアのずばりここがいい！」と感じる部分を理由とともに挙げた。多くの生徒たちが㊦部分（9小節目）を挙げた。下記は，㊦部分に対する意見である。

何が？どこが？	そう思った，そう感じた理由は？	
・㊦の最初「あけゆく」	・広がる感じがする。 ・それまで静かだった情景から一気に壮大になる感じが好き。 ・㊦ではSopranoとAltoがつかず離れずで，一定の音程幅だったが，㊦の最初はそれが広がっている。 ・ぶわあーときたから。	
・㊦から		・㊦まではSopranoとAltoが大体3度でハモリ，男声も単純だったが，㊦から複雑なハモリになり，この広がる感じがよい。 ・男声が2つに分かれ低音域が加わるから重厚な感じがする。
・㊦からのBass		

そこで，㊦部分から混声四部になることによって，どんなことを感じ取ったかを問い返したところ，次のような意見が挙がった。

響き

- ・響きがよくなる。 ・響きが幅広くなる。 ・体の深くまで響いてくる。

広がり

- ・広がる感じ。 ・より曲が広がってきれいになる。 ・一気に視界が広がるような感じ。
- ・何かが広がる感じがする。 ・広がる感じ，扉が開くみたいな。 ・ぶわっと感じる。
- ・それぞれのパートが広がっていく。 ・一気に壮大なる感じがする。

厚み

- ・音の厚みが一気に大きくなる。 ・厚みが出てきて曲に説得力が出る。
- ・Aの部分より層が多重になったので，より厚みが増し，ぶわっとした感じがした。サクサクパイからミルフィーユに！ ・厚みが増して，「あけゆく」という詩に合っている。

- ・厚みが出て、厳かな感じ加わる。 ・重厚感が増している。 ・どっしりした感じになる。
- ・「あけゆく」の「ゆく」←重い 「あびる」←広がる

深み

- ・支え、ベースが大きく深くなった感じ。

迫力

- ・迫力 ・ガッと迫力が出て、ウォットとなる。 ・声量が上がったように聴こえる。

その他

- ・躍動感がすごい。 ・盛り上がり ・華やかさ ・神々しさ ・立体感 ・奥幅が出る。
- ・逆に一つの音になったようだった。 ・男声にも2部できてかっこいい。
- ・音や空気の流れが生まれる。 ・新しいものが見える感じ。 ・ぼわーっと開く感じ。
- ・切り開く。 ・バスの動きが目立つ。
- ・じーんと響き、広大な世界に出たようなめずしさを感ずるような思いが伝わる。
- ・自然にクレシェンドになる。 ・鳥肌が立ちやすくなる。 ・団結力

(2) テクスチャに着目 (第2次第3時)

混声三部から四部が変わることによって生まれる響きの豊かさに気付くよう、9小節目にポイントを絞って歌わせながら問いかけていく授業を展開した。

まず、歌唱の際の常時活動のストレッチ (図1) と発声に次いで、各パートでの音程の確認を行った後、4パートでの合唱を行った。合唱場面では、混声四部の響きの豊かさは、何に



図1 常時活動のストレッチ

によって生まれるのかを問いかけていった。そのために①～⑦の場面を設定し歌わせ「どう感じた? 何に気付いた?」と問いかけた。(図2)

場 面	気付かせたいこと
① パートごとに単独で歌う	音と音の横のつながり
② 全パートで歌う	音と音の横のつながりと縦の重なり
③ Bass 抜きで歌う	それ以前の部分との響きの差
④ Alto と Tenor で歌う	響き (縦) の広がり感の有無
⑤ Soprano と Bass で歌う	旋律 (横) の広がり感の有無
⑥-1 Alto と Bass で歌う (Bass を GGGE で)	音と音の縦の重なり
⑥-2 Alto と Bass で歌う (Bass を GGFisE で)	音と音の横のつながり
⑦ ⑥-1, ⑥-2 それぞれを全パートで歌う	音と音の横のつながりと縦の重なり

音を言葉で表現することは難しく、なかなか言葉にならず、生徒たちからは抽象的な言葉が出てくるであろうと予測し、それをしっかり受け止め、その思いや意図を深めていけるよう問い返し、さらにその部分を繰り返し歌いながら生徒たちの気付きを音としても確かめるよう展開した。また、ホワイトボードに拡大楽譜を提示して、さらにポイントとなる9小節目の音符が動かせるように仕掛けをしたことによって、生徒たちの気付きを視覚的にもとらえやすいようにした。



図2 Tenorだけが歌っている場面

次に示すのは、前述の①～④の場面の授業記録である。

T : 一つ一つのパートがこのように歌っていることが分かりましたね。Bassだけが動いているってことに気付いたので、次はBass以外で歌います。Bassの人は聴いていて！

(SopranoとAltoとTenorで歌う)

T : Bassの人たち、どう感じた？気付いたことはない？

生徒B : 「ゆく」のところの下のミの音がないので、響きが足りない。

生徒C : 「あけゆく」のBassが動くところがいいのに、なくて味気ない。

T : なるほどね。もう一回歌ってみよう。

(歌う)

T : さらにどう感じた？

生徒D : 安定しなく、浮いている感じがする。

T : なるほどね。じゃあSopranoも抜いてみよう。

(AltoとTenorで歌う)

T : SopranoとBassの人たち、聴いていてどうだった？

生徒E : 二つのパートの動きが平坦でつまらない。

T : そうか。じゃあ、動きのあるBassを入れたらどうなるのかな？

(AltoとTenorとBassで歌う)

T : Sopranoの人たち、聴いていてどうだった？どんな感じがした？

生徒F : 自然でいい感じ。流れる感じがする。

生徒Bは、Bassの「ミ」の音がないことによる響きの不足を感じており、また、生徒Dは、安定感のなさを感じている。これは音楽の縦軸に着目していると言える。一方、生徒Cは、Bassの動きの味気なさ、生徒Eは、AltoとTenorの動きの平坦さ、生徒Fは、Bassが入ることによる流れのよさを感じている。これは音楽の横軸に着目していると言える。

5 おわりに

今回、混声四部合唱の響きの豊かさを気付かせる手立てとしてテクスチュアに焦点をあてた授業を展開した。音楽の構造を縦軸と横軸でとらえさせるというかなりレベルの高い試みを行ったが、歌いながら、聴きながら、そして視覚的にも音符の動きをとらえさせながら行い、その都度の教師の問いかけや問い返しによって、生徒たちの気付きや感じ取りを言葉として引き出すことができた。また、音楽を形づくっている要素の焦点化だけでなく、教材のポイントとなる部分（9小節目）の絞り込みをねらった。その部分は、あらかじめ教師の展開構想に組み込まれたものであったが、教師からの一方的な提示ではなく、展開の中での生徒の気付きから導き出すという工夫を行った。このことにより、生徒たちの興味・関心は高まり、レベルの高い展開にもついて来ようとする主体的な姿が見受けられた。

生徒たちの気付きや感じ取りの言葉は、やはり抽象的な言葉が多かったが、それを教師が受け止め、その言葉に含まれた思いや意図を問い返すことにより、生徒たちの音や音楽への思考がより深まっていき、発言が少しずつ積極的かつ具体的になっていった。

今回の取組ができたのには、これまでの歌唱における毎時間のストレッチと基礎的な発声練習（常時活動）の積み重ねがあったからこそである。

(文責 小村 聡)